
~ + Pictures + ~

Nako

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

）+Pictures+）

【Nコード】

N8561J

【作者名】

Nako

【あらすじ】

I take pictures for you . . .
I paint pictures for you . . .

僕は一瞬にして君の絵のとりこになった

ひよっとしたらその時 . . .

絵だけでなく、君自身にも一瞬にして惹かれてしまったのかもしれない

ない

今、僕が見ている空を君も同じように見上げていますか？

僕〜Ryuki Ohmiya

【東京都立桜葉特別支援高等学校 芸術科 クラス編成】

目の前に大きく貼り出されている紙。その中から僕の名前を見つけるのに、そんなに時間はかからなかった。

ここ、【東京都立桜葉特別支援高等学校】は、身体に障害を抱える、いわゆる『障害者』たちが何かを専門的に学ぶための高校。

『障害者のための高校』であることに間違いはないが、普通の高校といたって変わらない、と僕は思う。

今日からこの高校の生徒となった僕。名前は大宮龍稀。かつこいのは名前だけ。僕と言えば外見も中身も冴えない普通の15歳。そしてもちろん、ここに入学したのは僕にも障害があるから。

小学生の時、いじめに遭い、そのストレスで耳が聴こえなくなっ

た。医者には「ストレスが原因だからいつか聴こえるようになるよ」と言われ、早8年。正直、すでに諦めている。

こんな僕にだって夢はある。笑っちゃうかもしれないけど、僕の夢は『この世で一番美しいものを写真に残すこと』

ずっと、『この世で一番美しいもの』を探し続けていた。でも、答えは見つからなかった。この高校に通えば、少しはヒントが見えてくるかもしれない。そう思い、ここを受験した。

誤解しないでほしいんだけど、『プロの写真家になりたい』とは思っていない。憧れてない訳じゃないけれど、耳の聞こえない僕が『プロの写真家』になるなんて無理に決まっている。

『写真家』ってというのは、瞳に映っているものを撮るだけじゃない。耳で音を感じて撮る、というのにも必要だ。瞳、耳、鼻、そして身体全体で感じて、それで初めていい写真が撮れるのではないか。身体から何か一つ欠けてしまっ

真は撮れないんじゃないか。なんて、あくまで素人の意見だけど。

この高校に入学して、本気でプロを目指している人には申し訳ないけれど、障害者がいくらプロを夢見て頑張っても、その夢が叶うことは絶対にならない。そう思う。

こんな僕の心に優しい明りを灯してくれたのは、君だった

出会い(Meeting)

言葉& amp・手話で行われた長い入学式が終わり、みんな一斉に自分の教室へと向かう。

ちなみに、芸術科のクラスは障害によって分けられている。A組は視覚障害者、B組は聴覚障害者、C組は身体障害者と内部障害者、D組は知的障害者が集まっている。

僕のクラス、B組の生徒は僕を入れて20人。芸術の勉強をした
い聴覚障害者がこんなにいるとは思わなかった。

トントント

いきなり誰かに肩を叩かれた。後ろを向くと、綺麗な顔立ちをした男が立っている。

なるほど。さっきから女子たちが手話や筆談で「あの人かっこいい！」と騒いでいる訳が分かった。今、僕の肩を叩いたコイツのことか。

「つばき・しょうです。どうぞ宜しく。」
イケメン君が、手話で挨拶してくれた。さらに、紙に自分の名前を漢字で書いてくれた。ご丁寧にも。

紙には『椿翔』と漢字二文字で書かれている。小さな衝撃だった。未だかつて、名前を秀囲気があるのに一致している人を僕は知らない。僕は名前負けしているから、このイケメンがちょっと、いやかなり羨ましい。

やっぱり、世の中不公平だ。そんなことを思いながら、軽く挨拶を返した。

初対面の挨拶は、お互いの名前と「宜しく」の一言を言った後、会話が続かないから苦手だ。それなのにこのイケメン、テンション高く会話を続けてきた。

「俺のことは好きに読んで！ あ、俺は『龍』って呼んでいいか

な。それじゃ普通すぎでつまらないって言うならあだ名にしようか？ 何がいいかな……。『大宮』だから『大ちゃん』とか？ それとも『龍ちゃん』？ あ、『龍ちゃん』ってダチヨウ倶楽部の『上島竜兵』じゃないからなく、なんちゃって。」

僕は苦笑いだっただけど、会話が続かなくなるよりありがたかった。ふざけたことを言っているのに、イケメンの手話はキレがあり、かつこいい。

名前も外見も手話もかつこよく、話も上手い『椿翔』はモテるだろうな、と確信した。

「『龍ちゃん』でも何でもいいよ。僕はイケオつて呼ばせてもらうよ。イケてるオトコ、そのまんまだろ？」

実は、人にあだ名で呼ばれたり人をあだ名で呼んだりするのは初めてだ。いじめに遭い、人をあまり信じられない僕だけど、イケオは信じられると直感した。

「いいね〜イケオ！ 気に入ったよ。龍ちゃんもなかなかイケてるよ！ さっそくだけど質問！ 俺は写真家目指してるんだけど、龍ちゃんは？ もしかして絵とか描いちゃう感じい〜？」

イケオの『写真家』という言葉が頭に響いた。隠す必要はないので、僕は『プロの写真家になりたい訳じゃないけど、この世で一番美しいものを写真に残すこと』という夢を話した。『障害者はどんなに頑張ったってプロにはなれない』という考えは言わなかった。言える訳がなかった。

僕の夢を聞いたイケオはこう言った。

「そういうのもアリだよ。プロなんて目指さなくなっただけいいんだから。俺は龍ちゃんの夢を応援する。目指すものが違っても、同じ写真仲間！ これから一緒に頑張ろうぜ。」

イケオの言葉がどんなに嬉しかったか。プロを目指していないのにこの高校に入学したことにちよっとした罪悪感を感じていた僕は、『プロなんて目指さなくてもいい』というイケオの言葉で、心が救われた気分だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8561j/>

~ + Pictures + ~

2011年10月6日18時45分発行